

研究テーマ	生徒一人一人が完成の喜びを味わう学習指導の在り方 第 2 学年「空想の世界を旅しよう」の実践を通して
-------	---

筑西市立協和中学校 教諭 井上 利夫

I 研究テーマについて

本校のほとんどの生徒が今まで満足できる作品をつくることができたという実感に乏しく、絵を描くことに消極的である。そこで、本研究では、学習指導要領の美術の目標にある『美術の創造活動の喜び』を味わうことを通して、生徒がその喜びを次の表現への自信と意欲につなげていけるように活動を充実させようと考えた。

本題材では、自分自身で主題を生み出し、夢と目標をもち、心の中にあるものを表現することをねらいとしている。心の中にあるものを表現するためには、主題を決めることが特に重要となる。学習指導要領でも、感性を豊かに働かせて、自己の内面や自然の命や存在の尊さなど内面的価値をとらえ、創造的に美を追求し、心の世界などをつくり上げるための想像力を高めることが目標として謳われている。また、自らの目指す夢や目標の実現に向かって課題を克服しながら創意工夫して実現しようと積極的に取り組み、創造的な活動を目指して挑戦していく喜びや意欲、主体的な態度の形成が一層重視される。

しかし、この 2 年間の実践を顧みると、全員が揃って作品を完成し、全員で完成の喜びを味わうことのできる授業展開を模索してきたが、足並みの揃った完成はおろか、学期内に全員が作品を完成することはなく、長期休業日をまたいで完成となることが多く、理想から離れた結果となった。生徒の実態を見ると、本校の生徒は絵を描くことが好きである生徒が多い。しかしながらテレビやインターネットの一部のサイトに特化した漫画・イラストやゲームに登場するキャラクターを描く傾向が強く、美術分野全域を含めた絵画作品には興味が薄いように思える。したがって、日々目にする視覚映像が特定のイラスト等であるため、いざ空想画を描いたり自画像を描いたりすると何をもとめて発想して描いていいのか戸惑ってしまう生徒が多い。このように完成段階の足並みが揃わないのは、意外にも苦手意識の強い絵の具での彩色段階ではなく、主題を決めて、発想したり構想を練ったりする段階での停滞時間が長いことに気付いた。

そこで、学習指導要領にある「主題を決めること」の重要性より現実問題として、空想の世界とはいかなるものか生徒に指し示し、それに沿った発想を引き出すことの方が重要だと考えた。つまり、授業で行う空想画の定義を生徒目線まで下ろして分かりやすく明確にし、かつ空想画の発想の仕方をうまくシステム化していき、生徒が制作に立ち止まらないように指導していくことで制作の進行がスムーズに流れるのではないかと考えた。

そのために、直接的な描画表現とは異なった効果が期待できるモダンテクニックによる表現を題材として取り上げてみた。対象の客観的表現にとどまることなく、新たな意欲をもって創造活動に取り組むことができる題材であるといえる。なかでもコラージュは画面の再構成や、貼りこむ素材により様々な表現が可能のため、主体性やよりよい表現をしようとする態度の育成に適しているため、これらの技法を取り入れていこうと考えた。

また、加えてこの年代が絵に対して抱く固定観念も制作の足かせとなっていることが分かった。それは写真のような本物そっくりな絵を描きたい、いや描かないと評価されないという強迫観念とも言うべき考え方で、それに伴うあやふやな 3 次元論である。つまり写真のように描くということ

は、3次元世界の秩序を壊したくないことの表れで、モチーフの配置や大きさ・パースペクティブに至るまで辻褃が合うように描くということである。それは、絵を描くことへの専門的教養の希薄な中学生が表現できる許容範囲を越えている。むしろ、教師は、絵画はそうした現実の秩序を越えたところに真の価値があることを伝えなければならないと考える。

このようなことから、空想画の制作活動に取り組ませることを通して、主体的な自己実現を目指すことを目標に「生徒一人一人が完成の喜びを味わう学習指導の在り方」を主題として設定した。

II 研究の実際

1 題材名 「空想の世界を旅しよう」

2 題材の目標

モダンテクニックによる発想の仕方を工夫し、空想画の制作活動に取り組ませることを通して、生徒一人一人が完成の喜びを味わう学習指導の在り方について究明する。

3 題材について

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は、ゲームなどCGを駆使した映像を観ることへの関心は高いが、読書などの文字情報から空想を膨らませ、視覚的な絵の世界を表現することにはやや苦手意識をもっている。

【実態調査】 平成27年4月23日実施 2年2組 34名

1 漫画やアニメ、ゲーム世界等の現実とはかけ離れた世界観に浸ることはありますか。

・ある・・・22名 ・ない・・・12名

2 自分の思いや夢想等を絵として表現するのは得意ですか。

・得意・・・3名 ・どちらかといえば得意・・・5名 ・どちらかといえば苦手・・・9名

・苦手・・・17名

「どちらかといえば苦手、苦手」と回答した生徒の理由

○ 頭の中にあるものを絵として表現するのは難しいから。

実態調査の結果から、多くの生徒が、ゲームやアニメ、動画サイトに至るまで視覚的非現実世界に日々接していることがわかった。しかし、自分なりの空想世界を構築するというゼロからの発想に苦手意識があることも明らかになった。

(2) 題材観

学習指導要領には「美術を通じた教育(Education through Art)」という理念が据えられている。つまり、大切なことは結果として残る作品ではなく、制作の過程であり、今を生き成長しようとする生徒の活動であるという考え方である。この観点を中心に据え、空想画という題材を設定した。また、空想画は心の中にあるさまざまなものを目に見えるようにする作業である。自己を見つめる力が高まり、内面的価値を感じ取れるようになるこの時期の中学生にとって、空想画は人とは違う自分だけの世界を表現できる格好の題材である。身近なものを見つめ、

心の中にある願いや夢，未来のイメージを膨らませ，自分だけの空想の世界を個性的に表現できるようにしていく。

(3) 指導観

本題材においては，発想を誘発するモダンテクニックを使ったり，グループ活動における意見交換をしたりしながら空想力を養い，そこから願いや夢が込められた世界をつくりだす過程を通し，生徒の人格的成熟を目指して情操豊かに育つ力を育みたい。

4 題材の評価規準

観点	関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
評価規準	想像を膨らませてイメージをつくりだすことに関心をもち，主体的に構想を練ったり，技法を生かしたりしている。	印刷物等の視覚素材またはモダンテクニック等による偶然性のある視覚現象から自由にイメージを広げ，表現の構想を練ることができる。	自分の表現意図にあった技法を組み合わせる新たな表現方法を工夫したり，制作の見通しをもったりしながら，創造的に表現することができる。	表わされた不思議な世界および表現の工夫やよい点を見いだし，作品に取り入れたり，話し合ったりすることができる。

5 指導と評価の計画（13時間扱い）

時間	学習内容	評価規準・【評価方法】
第1次 ①	ダリの作品や先輩の空想画を鑑賞するとともにインターネットでモダンテクニックの動画を見る。	作品のどこが不思議なのか発見・探求し，発表することができる。【関】【発表・ワークシート】
	自分が表したい感情を探求し，その感情を色や形で表すためにグループで学びあう。	自分が表したい感情を具体的に言葉にでき，それを表すための色や形について探求しようとする。【関】【発表・ワークシート】
第2次 ① ②	モダンテクニック（マーブリング・スパッタリング）の練習をしできた模様から連想する。 また，表したい感情を見出したり，表したい感情に向かったモダンテクニック表現を行う。	新しく学ぶ技法に積極的に取り組み，意識の底に沈む自由なりのイメージや感情を引き出すことができる。 【関】【ワークシート】【想】【小作品】
第3次 ① ②	描きたいモチーフを選択し，色鉛筆やマーカーなどを使用し，できるだけ細密に描写する。	モチーフの色や形，質感に至るまで注意深く，また粘り強く細密描写することができる。 【創】【小作品】
第4次	ローラーを使用して，表したい	色（色味や全体のトーン）や形（有機的・無

① ② ③	感情を意識して背景を表現する。 また、既習のモダンテクニックを用いて背景の世界観を表現する。	機的) や塗り方に工夫を凝らしながら、既習事項の描法を駆使し、背景を表現することができる。 創【作品】
第5次 ①	表したい感情とできた背景世界を前にして、グループで話し合い活動をしてこれからの制作のヒントを出し合う。	互いの制作過程でのよい点を見つけながら、友だちにアドバイスをし、自由に発想を広げ、空想画の構想を練ることができる。また、ここで完成までの見通しをもつための計画を立てることができる。 想【ワークシート】
第6次 ① ② ③	第3次で描いた細密画を第4次で表した背景にコラージュしたり、思いついたイメージ世界をそこに加筆したりしていく。	小作品のコラージュや絵の具での彩色も加えながら、世界観を表すための質感や光に迫りながら、計画的かつ根気強く主題を追求できる。 創【作品】
第7次 ①	作品の鑑賞をし、できた作品のよさを味わう。	・友だちの表現の工夫などに気づき、観点別鑑賞ワークシートに感じ取った点を書くことができる。 鑑【ワークシート】

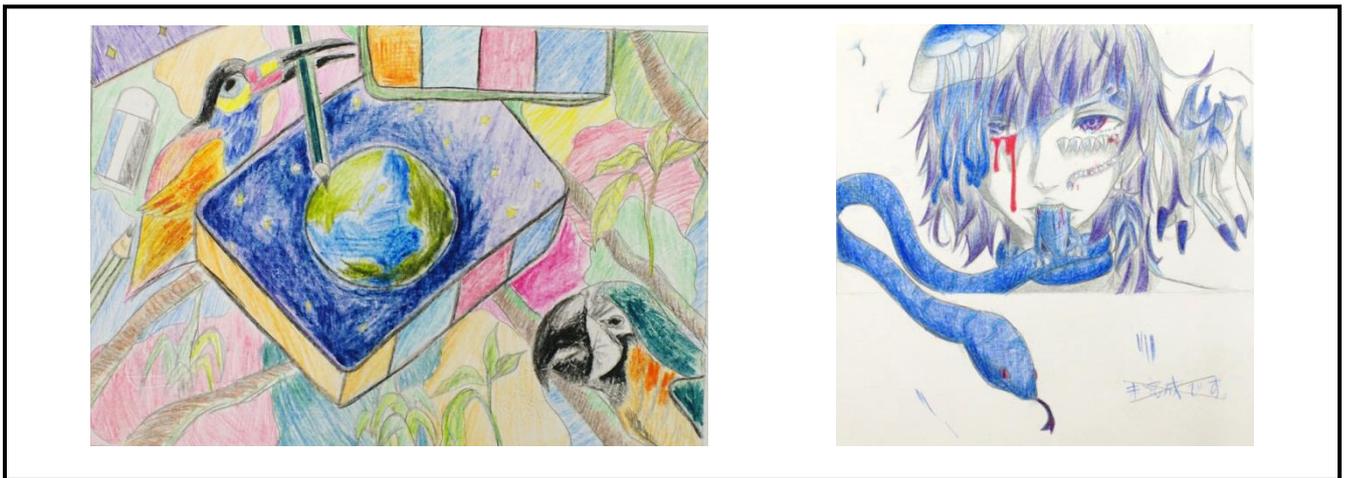
6 指導の実際

○ できたマーブリング模様からの発想カード

II

		
ぼっと見、何を連想したかな？ ミスセリー	ぼ・ どんなモチーフに使えるかな？ 植物、洋服、ヘッドホン、果物の切り口	ぼっと見、何を連想したかな？ 夏、燃えている
どんなモチーフに使えるかな？ 食べ物	どんなふうに使おうと効果的かな？ 傘	どんなモチーフに使えるかな？ 鳥のなか
どんなふうに使おうと効果的かな？ 風景とか、ミッドナスやレビのかが、おんせががみに使ったりする。	どんなふうに使おうと効果的かな？ 何かを解やか・華やかにしたいときに使う いいと思います。	どんなふうに使おうと効果的かな？ 夏の夜のニュースで夏が燃えている

- 「ぼっと見、何を連想したかな？」の問いに、『天体や水紋、火紋』と回答する生徒が多かった。
- 「どんなモチーフに使えるかな？」の問いに、上記の回答と似たものが多かったが、中には『ヘッドフォンや果物の切り口、スマートフォンの画面など』と生活に根ざした回答も多く出た。
- 「どんなふうに使おうと効果的かな？」の問いに、上記と似た内容が多かったが、使い方を質問したので、『モチーフの陰の部分に合わせて切って使う』とか回答してほしかったが、質問が不親切だった。



○上の作品グループは、コラージュが発想の足かせとなるという理由で自分の世界観にこだわって空想画の下絵を描いた。



作品 A



作品 B



作品 C

○今回、コラージュを取り入れて発想をした中で顕著な好例が作品 A と言える。生徒の発想だけを頼りに制作させると、作品 B にあるように、イメージ（この場合は自転車）を図や抽象化された記号のように使用する場合が多い。その点、作品 A はイメージ（この場合はイルカ）から発想が喚起され、「略式化された図」ではなく三次元的な映像世界がイメージされてダイナミックな下絵が描かれている。

作品 D は青りんごの皮が空間に道を形成しており、その形状から島への変異を描いている。



作品 D

Ⅲ 研究の成果と課題

中学校第2学年「空想画～空想の世界を旅しよう～」の学習を通して、モダンテクニックによる発想の仕方を生かした題材を研究した結果、次のことが明らかになった。

(1) モダンテクニック（今回はマーブリング、スパッタリング、コラージュ）は、「絵を描く」作業ではなく、純粹に「効果」を楽しむ行為だったので、中学2年生にとって難しい課題である空想画の長い導入段階としては、楽しく美術に取り組む生徒が多かったので有効な手段だったと言える。絵を写實的に描く技術がない生徒にとっても次の授業をワクワクしながら迎えられ、空想画という題材のハードルを下げる事ができた。

(2) マーブリングに関しては、できていく効果や図柄に触発され、昨年度までのような漠然とした世界（例えば、宇宙、空、海、砂漠など）とは別の、身近の世界への発想にイメージが移行することを願ったが、昨年度と同様、中学生によくある空想画の典型から脱却することができなかった。

(3) コラージュに関しては、印刷物が発想の起点となり、自身の心の中に空想の世界観がない多くの生徒にとって、空想画の描き方のヒントとしての役割は果たした。しかし、この発想の方法で題材を終えてみると、コラージュ技法が空想画を描く上で、小手先の方法論でとまってしまうことがわかった。発想が蜘蛛の巣のように平面状にどんどん広がりを見せ、空想画が描ける期待感に溢れるが、その発想の糸をどこかに帰着させないと発想が延々とループを描き、結局、自身で何が描きたかったのかわからず、数時間経つとぱたりと筆が止まる生徒もまた多くいた。モダンテクニックを空想画で利用するには、教師側が明確にその効果を作品制作にいかせられるか把握した上で、方向性を提示する必要があることがわかった。

○今後の課題として

(1) 全員が揃って作品を完成させ、完成の喜びをみんなで味わうためにマーブリングやスパッタリング、コラージュに至り発想の段階での授業数を増やし過ぎたため本制作の時間が不足し、完成時期が全体として大きくずれ込んでしまった。次年度以降はモダンテクニックの授業を効率よく進めるために、いくつかそれらテクニックを生徒に絞らせて、授業を展開する必要がある。それには生徒の主体的な取捨選択が必須であるため、作品制作が時系列にわかる掲示物やワークシートなどをチャート式に用意する必要がある。加えて、授業時間内では全生徒に適切なアドバイスができず、次時に再び制作に滞りが見られた生徒がいたので、作品を回収して適切な評価やアドバイスを書き入れたい。

(2) アイデアがなかなか浮かばないという生徒をさらに減らすためにいろいろな手立てを講じたにもかかわらず、アイデアが浮かばない生徒がいた。これは、題材ごとに場当たりの生徒任せの放任指導も含まれていたことも見逃せない。これら生徒たちはどう発想したらよいかの素養がないことを把握した上で発想のトレーニングをする必要がある。題材のねらいに即したトレーニングの手立てを考えるとともに、授業始めに短いトレーニングを継続していくことで様々な表現の能力を伸ばしていくことが大切である。

(3) 場の設定の工夫

空想画を発想する上で、鍵となるのが背景、つまり「場」の設定である。コラージュはあくまで主要となるモチーフには有効だったが、空想画を構築していく上で「場」が設定されていないと小手先の発想のおもしろさに囚われ、しっかりとした「作品」にまで昇華させられないことがわかった。制作の段階での停滞時間が長かったこの場面でいくつか「場」を教師側で設定して、それらを選択させる形式をとる方が生徒にとって発想しやすいのではないかとの反省点が残った。